

「反り」の文化



斐川平野の散居村



民家の生垣



石垣



斐川平野の築地松



古民家の屋根の棟



民家の屋根の棟



四隅突出型墳丘墓

■風土が育む造形「反り」

出雲地方には日本の他の地域では殆ど見られない独特の形に対する感性が育まれている。それは、この地域に生まれ、長らく住んでいる人々にとって殆ど意識されない無意識下の感性である。

その感性とは「反り」を心地よいと感じる感性である。民家の屋根の棟、石垣の先端、そして生垣の先端などにも見ることができ、極、当たり前のこととして形作られている。また、古代の古墳の形にも見て取る事が出来る。出雲地方を代表する古墳の形態に四隅突出型墳丘墓があるが、これも平面形として四角形の四辺がそれぞれ反っている。このような感性は出雲の風土によって作られてきたものだと思われる。その風土とは日本海側の地域に共通の冬、北西からの厳しい季節風が吹き荒ぶ自然環境に育まれたものであり、朝鮮半島に近く古代から人的及び文化的な繋がりが作り出したものではないかと思われる。

「反り」は決して機能的な意味を持つものではない。たとえば斐川平野(出雲平野)の散居村の佇まいに見られる「築地松」と呼ばれる防風林のようにその土地の気候特性から機能的に形成されたものもある。しかし、その形は同じような機能的意味から作られた富山県の砺波平野の散居村の防風林とはまったく違い非常に幾何学的である。そこには、「反り」を育む感性が働いている。

このような感性が現代の感覚に合い難く薄れていくのは残念な気がする。